

いじめ問題のスクリーニングに関する研究

— 投影法的接近 —

今井智子

I 問題と目的

1. 問題 ～実態把握の難しさ～

文部省(1996)は、小・中・高校生と教師、親あわせで約2万人を対象に、1995年12月から1996年1月にかけて、いじめの実態や発生原因の調査を実施した。中学生の結果では、13.2%が今の学年でいじめられた経験を持っている。そして、いじめられても、教師に言う中学生は18.9%であった。また、今の学年でいじめられた経験を持つと回答した子供が在籍する学級において、担任教師の28.9%が「自分のクラスにいじめはない」と回答している。このことは、教師の把握している以上にいじめが存在し、かついじめの実態把握の難しさを示唆していると考えられる。つまり、教師には、相談などの具体的な対応や、教育実践時における適切なサポートを行うために、より緻密な生徒の実態把握を求められているが、現状は生徒に対する日常観察には限界が存在することを示唆している。

2. 抵抗の少ない質問紙の必要性

この、いじめ被害を教師や親に訴えるという生徒が2割弱に過ぎないという実態は、教師が実態を把握するために用いる質問紙において、直接生徒のいじめ被害の可能性を問いただしていると、生徒に抵抗を感じさせ、正確な実態を把握することはできないと考えられる。したがって、実態を把握する質問紙は、記名をしても、生徒にとって抵抗の少ない形式を検討する必要がある。

そこで、調査の意図がわかると防衛する中学生に対しては、意図が悟られにくい投影法的な質問紙を用いたほうが適切ではないかと考えた。これまでの言語的な質問紙の利点には、結果の解釈が容易であることが挙げられるが、意図が悟られると防衛されやすく、個人を特定すると、さらにその傾向が強くなる。一方、投影法的質問紙の利点には、個人を特定できる記述を要求しても防衛されにくいことがある。欠点は、結果の解釈が難しいことである。

3. 防衛されにくい質問紙

いじめに特徴的な感情には、いじめによる無力感や屈辱感、人間不信などによって引き起こされる、怒り、復讐心、攻撃性、希死念慮などがある。これらの感情は、抑圧されていると考えられるので、いじめを特定するには、抑圧された感情を表出できるようにすればよいだろ

う。このことを可能にすると考えられるテストとして、TATが挙げられる。対人葛藤の場面で、生徒が抑圧している感情を喚起することを目的としてTATを質問紙の項目に使用することにした。

4. 目的

本研究の目的として、①生徒に防衛されにくいいじめ質問紙を作成すること、②作成されたいじめ質問紙の実施結果を標準化し、学校臨床においていじめをスクリーニングできる質問紙を作成すること、以上2点をあげる。

II 方法

1. 質問紙の作成

構成は1. フェイスシート、2. 学校不適應に関する言語的項目、3. TATを使用した投影法的質問項目、4. いじめ経験に関する項目、の4部から成る。なお、質問紙は、添付資料「1. 質問紙1」に添付した。

2. 手続きおよび被験者

調査は1998年11月に行った。愛知県内の公立中学校5校、1,2年生、1319人を対象とし、教師の立ち会いのもと、授業時間に集団実施した。

III 結果・考察

1. 尺度の作成

(1) 学校不適應に関する項目について

分散分析の結果から、いじめ無経験群といじめ経験過去群、またはいじめ無経験群といじめ経験現在群で有意差が見られた項目を合計して、「学校不適應得点」として、合計得点を算出する。また、分散分析の結果、いじめ経験の主効果が有意であった($F(2,1202) = 59.81, p < .001$)。Tukey法($p < .05$)を用いた多重比較から、いじめ無経験群<いじめ経験過去群、いじめ無経験群<いじめ経験現在群の有意差が見出された。 α 係数は.86であり、高い信頼性があると判断した。なお、いじめ経験過去群といじめ経験現在群間には、有意差は見られなかった。

(2) TATに関する項目について

いじめ経験現在群の選択特徴を見るため、TAT全項目について、数量化Ⅲ類を実施して、次元の抽出を試みた。その結果、第1のカテゴリーは、ネガティブな項目からポジティブな項目の順に寄与率が高かった。そこで、寄与率が-0.01以下の項目は、それを選択するごとに寄与率の絶対値分を加算し、TATネガティブ得点(以

下 TAT-N 得点とする)とし、寄与率が 0.01 以上の項目は、それを選択するごとに寄与率分を加算し、TAT ポジティブ得点(以下 TAT-P 得点とする)とした。

また、それぞれの下位得点として、TAT-N 得点のうち、外的状況に関する項目を加算したものを TAT-N 外的状況得点、内的状況に関する項目を加算したものを TAT-N 内的状況得点、状況に関する項目を加算したものを TAT-N 対処得点とし、それぞれの値を求める。同様に、TAT-P 外的状況、TAT-P 内的状況、TAT-P 対処を求める。

(3) 全尺度の結果についての考察

学校不適応得点、TAT-N 得点では、共に分散分析の結果、いじめ経験現在群といじめ経験過去群は、いじめ無経験群よりも有意に得点が高かった。また、TAT-P 得点について分散分析を実施した結果、いじめ経験現在群といじめ経験過去群は、いじめ無経験群よりも有意に得点が低かった。このことから、いじめ経験群はいじめ無経験群よりも学校不適応に不適応を示し、精神的健康を害していることが示唆される。また、TAT-N 得点が高く、TAT-P 得点が低いことから、TAT の反応においても、ネガティブな反応を多く示していると考えられ、対人関係に問題があると推測される。

学校不適応得点、TAT-N 得点、TAT-P 得点においても、また、TAT-N 得点と TAT-P 得点の下位尺度においても、いじめ経験現在群といじめ経験過去群との間に有意な差は見られなかった。このことについて、いじめを経験した生徒は、いじめが収まっても他人に対する信頼感は回復せず、学校不適応や、精神的に不健康な状態が続いていることが伺える。つまり、いじめを経験した生徒に対するケアの必要性を示唆している。このような意味では、本質問紙を用いて、心のケアを必要とする生徒のスクリーニングを行うという活用の可能性も示唆されたと言えよう。

2. いじめ現在経験者の特定

(1) 評価点を求める

各尺度における被験者全体の平均と SD を算出し、次に、設定した基準に従って、評価点をつける。

(2) いじめ経験現在群の特定

各評価点に該当する被験者のうち、いじめ経験現在群の人数を「いじめ特定人数」、その割合を「いじめ特定率」とする。さらに、いじめ経験現在群の中で、いじめと特定されなかった人数の割合を「危険率」とする。具体的に以下に例示する。

学校不適応得点の評価点が 10 に該当する被験者は、47 人。そのうちいじめ経験現在群は 13 人。つまり、いじめ特定人数は 13 人、いじめ特定率は、 $13 \div 47$ で、27.7% となる。また、いじめ経験現在群は、合計 77 人であるので、危険率は、 $(77 - 13) \div 77$ で 83.1% となる。

1 尺度では、特定率は 100% に満たないが、2 尺度、3 尺度を組み合わせると、特定率が上がることが示された。しかし、危険率は 94% と高い。

(3) いじめ経験現在群の特定についての考察

① 特定率と危険率

1 尺度では特定率が 100% に満たないが、2 尺度、3 尺度と尺度を増やすにつれて、特定率が上がることが示された。また、いじめ特定率が高くなる尺度の組み合わせは、1 尺度では、TAT-P 外的状況尺度が、2 尺度では、学校不適応尺度と TAT-P 尺度、TAT-N 外的状況尺度と TAT-P 外的状況尺度が、3 尺度では、学校不適応尺度と TAT-N 尺度と TAT-N 対処尺度が該当した。つまり、学校不適応尺度のみ、TAT 尺度のみでは、いじめ経験現在群の特定は難しく、いじめを経験することによって生じる学校不適応について、意識化された部分を測定する学校不適応尺度、および無意識の感情を測定する TAT 尺度の双方が、いじめのスクリーニングの精度を高めるのに必要であることが示されたと言えよう。

さらに、TAT-N 外的状況尺度と TAT-P 内的状況尺度の組み合わせは、上位尺度(学校不適応尺度、TAT-N 尺度、TAT-P 尺度)ではスクリーニングできなかった、いじめ経験現在群の特定を可能にした。このことは、被験者が意識化できる学校不適応の項目を使用しなくても、無意識の感情を取り上げることによって、いじめ経験現在群のスクリーニングが可能である事を示す。つまり、より防衛の少ない質問紙を作成しようと評価できる。

しかし、特定率は 100% であっても、危険率は最低でも 94% と高い。評価点が低ければ特定人数は多いが、いじめ経験過去群、いじめ無経験群も該当者に多数含まれるため、特定率はむしろ下がる。逆に評価点が高ければ特定率は上がるが、いじめ特定人数も少ないため、危険率が上がる。

理想のスクリーニングは、特定率が高く、危険率が低いものである。つまり、いかにいじめ経験現在群だけを特定するかである。それには尺度の精度を上げ、確実にいじめ経験現在群と、いじめ無経験群やいじめ経験過去群を判別できるようにすることが必要である。

② 精度を高めるために

本質問紙を用いて特定率が 100% となった被験者に対するいじめの内容を見ると、深刻な状況が伺える。どの被験者にも共通なのが、頻度がほとんど毎日であること。また、期間も 1 ヶ月、半年、1 年と、長期に渡っていることである。今後の課題として、期間が比較的短く、頻繁に起こっていないいじめもスクリーニングできるような質問紙を作成することが挙げられる。

また、尺度を作成する際に、性差を考慮に入れていないため、性別毎に尺度を作成し、性別毎に特徴的な反応を集計するということが必要となるだろう。